

『躬恒集』注釈（十三）

平沢竜介・嶋田陽子・玉木紗也香・  
中井瑞葉・福地治子・渡辺優子

740 今日けふよりは夏なつの衣ころもになりぬれど着きる人ひとさへはかはらざりけり

【語釈】

○作者名―廿卷本では「源のませ方」。

【通釈】

今日からは夏の衣になったけれど、その衣を着る人までは変わらないことだ。

▽更衣の歌。

## 【類歌・参考】

あきのはじめによみ侍りける

安法法師

夏衣まだひとへなるうたたねに心してふけ秋のはつ風

(拾遺和歌集・卷三・秋・一三七)

卯月のついたちに更衣の心をよめる

源師賢朝臣

われのみぞいそぎたたれぬなつごろもひとへに春ををしむ身なれば

(金葉和歌集二度本・卷二・夏・九四)

堀河院御時、百首歌たてまつりけるととき、更衣の心をよめる

前中納言匡房

夏ごろもはなのたもとにぬぎかへて春のかたみもとまらざりけり

(千載和歌集・卷三・夏・一三六)

741 身みをもかへ思おもふものから恋こひといへば燃もゆるなかにも入いる心こころかな

## 【他出文献】

ナシ

【語釈】

○身をもかへ―命をかけて。命と引き換えに。甘巻本では「身をもかつ」。○思ふものから―思っているの。  
○入る心かな―甘巻本では「いれるこゝろか」。

【通釈】

命をかけて思っているの、恋という燃える火の中にも入る心であることよ。

【類歌・参考】

(題知らず)

夏虫の身をいたづらになすこともひとつ思ひによりてなりけり

(古今和歌集・卷十一・恋一・五四四)

(読人しらず)

(題知らず)

みつね

夏虫をなにかいひけむ心から我も思ひにもえぬべらなり

(古今和歌集・卷十二・恋二・六〇〇)

返し

(よみ人しらず)

君はただ袖ばかりをやくたすらん逢ふには身をもかふとこそさけ

(拾遺和歌集・卷十一・恋一・六七五)

742 はつかしの森もりのはつかに見みしものをなど下草したくさの繁しげき恋こひなる

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○作者名―廿巻本では作者名なし。○はつかしの森の―「はつか」を導く序詞。「はつかしの森」は山城国の歌枕。現在の京都市伏見区羽束師水町の羽束師神社。○はつかに―わづかに。ほのかに。○下草の―「繁しげき」を導く枕詞。「はつかしの森」と「下草」は縁語。廿巻本では「なつくさの」。○繁しげき恋こひなる―廿巻本では「しげきおもひぞ」。

【通釈】

わずかに姿を見ただけなのに、どうして絶え間のない恋をするのだろうか。

【類歌・参考】

題知らず

(よみ人しらず)

わすられて思ふなげきのしげるをや身をはつかしのもりといふらん

(後選和歌集・卷十・恋二・六六四)

この集撰し侍りけるとき、うたこはれておくとてよめる

参議師頼

いへのかぜふかぬものゆゑはづかしのもりのことの葉ちらしはてつる

(金葉和歌集二度本・卷九・雑上・五五五)

百首歌めしける時、よませ給うける

崇徳院御製

(前略) 此ことを　しのびならひし　なごりにて　よの人ぎきは　はづかしの　もりもやせんと　おもへども  
こころにもあらず　かきつらねつる

(千載和歌集・卷十八・雑下・一一六二)

忍恋の心を

土御門院御製

わが恋はいはせの杜の下草のみだれてのみもすぐす比かな

(新後撰和歌集・卷十一・恋一・七九〇)

《これより某年躬恒判問答歌合による補遺。平安朝歌合大成による》

むかしのうたよみの春秋をあはせける

左

くろぬし

743

おもしろくめでたきことをくらぶるに春はると秋あきとはいづれまされり

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○おもしろく―趣がある。風流だ。○めでたき―美しい。優れている。見事だ。

【通釈】

昔の歌人が春と秋を合わせた歌

左

くろぬし

趣があつて優れていることを比べると、春と秋ではどちらがまさっているだろうか。

【類歌・参考】

題しらず

藤原惟規

なにとなく花やもみちをみるほどに春と秋とはいくめぐりしつ

(風雅和歌集・卷十七・雑下・一八五六)

(久安百首)

(季通朝臣)

はこやにはふたりの君のもろとも春と秋にとめるとぞきく

(夫木和歌抄・卷三十六・雑十八・一六八一)

744

春はただ花こそは咲け野べごとに錦をはれる秋はまされり

右 こたふ

とよぬし

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○錦をはれる―錦を延べ広げる。

## 【通釈】

右 答える

とよぬし

春はただ花が咲くだけだ。野辺ごとに錦を延べ広げる秋は勝っている。

▽野辺の草花を錦と見立てる。

## 【類歌・参考】

反歌

やまのへのいそしのみるはおのづからなれるにしきをはれるやまかも

(万葉集・卷十三・雑歌・三二四九)

後一条院御時、上達部殿上人さが野の花みにまかりて内にかへりまゐりて侍りけるに、中宮の御かたの台盤所のみすに女郎花の枝をさされたるをみて読み侍りける

堀川右大臣

一枝の花の色だにあるものを野べのにしきを思ひやらなん

(玉葉和歌集・卷四・秋上・五二三)

返事

西行法師

鹿のたつ野べのにしきのきりはらはのこりおほかる心ちこそすれ

(統詞花和歌集・卷四・秋上・二一六)



仁和のみかどみこにおはしましける時、ふるのたき御覽ぜむとおはしましけるみちに遍昭がははの家にやどりたまへりける時に、庭を秋のものにつくりておほむ物がたりのついでによりてたてまつりける

僧正遍昭

さとはあれて人はふりにしやどなれや庭もまがきも秋ののらなる

(古今和歌集・卷四・秋上・二四八)

左

くろぬし

745 秋はただ野べの色こそ錦なれ香さへにほへる春はまされり

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○香さへにほへる―香りまで匂っている。

【通釈】

左

くろぬし

秋はただ野辺の色が錦のようになっていっただけだ。色の他に香りまで匂っている春は勝っている。

▽梅の花の香りを言うか。

【類歌・参考】

(題しらず)

(よみ人しらず)

春雨にはほへる色もあかなくなにかさへなつかし山吹の花

(古今和歌集・卷二・春下・一二二)

同

嘉陽門院越前

さか木とるとよ宮人の神あそびたちまふ袖のかさへかくはし

(夫木和歌抄・卷十八・冬三・七五二)

貞応三年一字百首歌

民部卿為家卿

らんせいのにしきの色もいかならんかさへにほへる山ざくらかな

(夫木和歌抄・卷三十三・雑十五・一五六四九)

右

とよぬし

746

さをしかのこゑふりいでて、くれないの紅に野べのなりゆく秋はあきまされり

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○さをしかのこゑ―「ふりいでて」を導く序詞。「さをしか」は雄の鹿。○ふりいでて―「声高く鳴く」と「紅を水に振り出して染める」の意を掛ける。

【通釈】

右

とよぬし

雄鹿が声を高く上げて鳴き、紅を水に振り出して布を紅に染めるように野辺が紅になっていく秋は勝っている。

【類歌・参考】

(題しらず)

(よみ人しらず)

思ひいづるときはの山の郭公唐紅のふりいでてぞなく

(古今和歌集・卷三・夏・一四八)

(題しらず)

(つらゆき)

紅のふりいでつつなく涙にはたものみこそ色まさりけれ

(古今和歌集・卷十二・恋二・五九八)

(題しらず)

躬恒

あきふかきもみぢのいろのくれなるにふりいでつつなくしかのこゑかな

(新勅撰和歌集・卷五・秋下・三〇〇)

あきのゝはからくれなるになりにけりしかふりいてゝなきそめしより

(元真集・一六九)

747 霞<sup>かすみ</sup>たち野<sup>の</sup>べを錦<sup>にしき</sup>にはりこめて花のほころぶ春<sup>はる</sup>はまされり

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○はりこめて―一面に貼り付けて。○ほころぶ―咲く。花が開く。「綿」と「ほころぶ」は縁語。

【通釈】

霞が立ち、野辺に錦を一面に貼り付けて花の咲く春が勝っている。

▽野辺に花が咲く様を錦に見立てている。

【類歌・参考】

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

在原むねやな

秋風にほころびぬらしふぢばかまつづりさせてふ蟋蟀なく

(古今和歌集・卷十九・雑体・一〇二〇)

さはやけ

(よみ人しらず)

春風のけさはやければ鶯の花の衣もほころびにけり

(拾遺和歌集・卷七・物名・四一四)

待草花といへることをよめる

皇后宮美濃

藤ばかまはやほころびてにほはなむ秋の初風吹きたたずとも

(金葉和歌集・二度本異本歌・六七五)

右

とよぬし

746 賤機しづはたに天あまの羽衣はごろも織おりかけて彦星ひこぼしをまつ秋あきはまされり

## 【他出文献】

ナシ

## 【語釈】

○賤機「賤」は「綾」が舶来の織物であるのに対し、日本古来の織物の一種。「賤機」は「賤」を織る織機。またはその織った布。○天の羽衣―天人が着る着物。○織りかけて―布を織って、それをものにかけて渡して。

## 【通釈】

右

とよぬし

賤機で天人の着る着物を織って掛け渡して、彦星を待つ秋は勝っている。

## 【類歌・参考】

しのびたる人につかはしける

贈太政大臣

しづはたに思ひみだれて秋の夜あくるもしらさげきつるかな

(後選和歌集・卷十三・恋五・九〇二)

いひわづらひてやみにける人に、ひさしうありて又つかはしける

(よみ人しらす)

しづはたにへつるほどなり白糸のたえぬる身とはおもはざらん

(後選和歌集・卷十四・恋六・九九九)

返し

(よみ人しらず)

へつるよりうすくなりにししづはたのいとはたえでもかひやなからん

(後選和歌集・卷十四・恋六・一〇〇〇)

七月七日庚申にあたりて侍けるによめる

大江佐経

いとどしくつゆけかるらんたなばたのねぬよにあへるあまのはごろも

(後拾遺和歌集・第三・夏・二三九)

堀河院御時、百首歌たてまつりける時、よめる

二条太皇太后宮肥後

たなばたのあまのはごろもかさねてもあかぬ契やなほむすぶらん

(千載和歌集・卷四・秋上・二三七)

左

くろぬし

749

青柳あをやぎに糸いとよ縫りかけて朝あさごとに玉たまをつらぬく春はるはまされり

【他出文献】

ナシ

## 【語釈】

○青柳―青い芽を吹いた柳。○糸縫りかけて―糸を縫ってかけて。

## 【通釈】

左

くろぬし

青柳に糸を縫ってかけて、朝ごとにその糸で玉をつらぬく春は勝っている。

▽青柳を糸、白露を玉と見立てる。

## 【類歌・参考】

(歌たてまつれとおほせられし時によみてたてまつる) (つらゆき)

あをやぎのいとよりかくる春しもぞみだれて花のほころびにける

(古今和歌集・卷一・春上・二六)

西大寺のほとりの柳をよめる

僧正遍昭

あさみどりいとよりかけてしらすつゆをたまにもぬける春の柳か

(古今和歌集・卷一・春上・二七)

家に十首歌よみ侍りけるに、柳露

山階入道左大臣

さは姫の手染の糸をよりかけて露の玉ぬく春の青柳

(続後拾遺和歌集・卷一・春上・四二)



女御徽子女王家歌合に、柳

壬生忠見

青柳のいとは乱れて春ごとに露のたまらぬ緒とや成るらん

(続後拾遺和歌集・卷一・春上・四三)

右

とよぬし

750

虫むしの音ねの草くさむらごとに夜よもすがら鳴なきあかしたる秋あきはまされり

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○夜もすがら―夜通し。一晚中。

【通釈】

右

とよぬし

虫の音が草むらごとに一晚中鳴いて夜を明かす秋はまさっている。

【類歌・参考】

(題不知)

永源法師

やへむぐらしげれるやどはよもすがらむしのねきくぞとりどころなる

(詞花和歌集・第三・秋・一一九)

題しらず

大江宗秀

夜もすがら露のやどりに鳴く虫の涙数そふ庭のあさぢふ

(新後拾遺和歌集・卷五・秋下・四一六)

よすがらむしのなきけるをききたまで

梅壺女御

よもすがらなきあかしけるむしのねにともいできぬるここちこそすれ

(万代和歌集・卷五・秋下・一一三八)

751 左

踏みちらす花もいろいろ匂ひつつ鶯うぐひすのなく春はまされり

くろぬし

【他出文献】

ナシ

【通釈】

左

踏み散らす花もいろいろに色づいて鶯が鳴く春は勝っている。

くろぬし

【類歌・参考】

うぐひすのなくをよめる

そせい

こづたへばおのがはかせにちる花をたれにおほせてこころなくらむ

(古今和歌集・卷二・春下・一〇九)

(題しらず)

(よみ人しらず)

袖たれていざわがそのにうぐひすのこづたひちらす梅の花見む

(拾遺和歌集・卷一・春・二八)

らに

から衣すそ野に匂ふふちばかまふみちらしたるしかのあとかな

(新撰和歌六帖・第六・一九八六)

堀川院御時百首

俊頼朝臣

そめかけてまがきにさぼすふち袴まだきもとりぬみちらすかな

(夫木和歌抄・卷十一・秋二・四五〇四)

752 右  
 きりぎりすぐ鳴くな草むらの白露しろつゆに月影つきかげみゆる秋あきはまされり  
 とよぬし

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○つきかげ―月の光。

【通釈】

右

きりぎりすが鳴く草むらの白露に月の光が宿って見える秋は勝っている。

とよぬし

【類歌・参考】

月歌の中に

中務卿親王

人とはぬむぐらのやどのつきかげにつゆこそ見えね秋かぜぞふく

(続古今和歌集・卷四・秋・四一七)

なつのよのむし

世中をなにゝたとへむくさのはのつゆにやとりてみゆるつきかけ

(能宣Ⅰ・二五三)

虫をよめる

前齋院六条

露しげきのべにならひてきりぎりすわがたまくらのしたになくなり

(金葉和歌集二度本・卷三・秋・二一八)

三百首歌中に

中務卿親王

つゆになくをばながもとのきりぎりすたがたまくらのなみだそふらん

(続古今和歌集・卷四・秋・三七八)

753

おもしろきことは春秋<sup>るあきわ</sup>分きがたしただをりふしの心<sup>こころ</sup>なるべし

みつね判す

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○分きがたし―判別しにくい。判断しにくい。○をりふし―その場合その場合。その時々。○心―気分。情趣。

【通釈】

みつね判す

趣があることは春秋どちらか判断しにくい。ただその時々々の気持ちによるのだろう。

【類歌・参考】

あるところに春秋いづれかまさるととはせ給ひけるに、よみてたてまつりける

紀貫之

春秋に思ひみだれてわきかねつ時につけつうつる心は

(拾遺和歌集・卷九・雑下・五〇九)

題しらず

藤原惟規

なにとなく花やもみちをみるほどに春と秋とはいくめぐりしつ

(風雅和歌集・卷十七・雑下・一八五六)

(題しらず)

(よみ人しらず)

いかならんをりふしにかはくれ竹のよるはこひしき人にあひ見む

(拾遺和歌集・卷十三・恋三・八〇五)

あひがたかりける女につかはしける

業平朝臣

思はずはありもすらめどことのはのをりふしごとにたのまるるかな

(統後選和歌集・卷十三・恋三・八五六)